

(論文の要旨)

高等学校国語科における説明的文章読解指導の研究
—相互主体的関係を視座として—

広島大学大学院 教育学研究科 博士課程後期
学習開発専攻 カリキュラム開発分野

篠崎 祐介

2015

1. 研究の目的と方法

本研究は、相互主体性に基づく高等学校国語科の説明的文章読解指導の理論構築を目的とする研究である。

研究の手続きは次の通りである。まず、高等学校国語科の説明的文章指導の問題の所在を明らかにするために、理論構築の基礎となる記述研究として、高等学校国語科教員を対象としたフォーカスグループインタビュー（FGI）を行い、教員の説明的文章読解指導に対する意識を調査した（第二章）。また、本研究を貫く思想的背景を明らかにするため、思想研究として相互主体的関係という視座の考察を行った（第三章）。この考察に基づき、先行研究である森田信義の説明的文章読解指導論（森田理論）を批判的に検討し、相互主体的関係における読者の批判の果たす役割を考察した（第四章）。一方で、相互主体的関係における筆者の果たす役割を考察する手がかりとして、高等学校国語科の説明的文章の主流である「評論文」の特性を明らかにし（第五章）、その特性に基づく教材分析方法の検討を行った（第六章）。最後に、これらの検討を踏まえ、説明的文章読解の指導方法論の構築に向けての展望を述べた（第七章）。

2. 研究の意義

本研究の意義は三点指摘できる。第一に、グループインタビュー調査の結果が、構築される理論が実践に寄与するかどうかを判断するための視座を提供する点である。第二に、相互主体性という観点を導入し、読解を相互主体的なコミュニケーションと捉えることによって、読解における解釈と批判の乖離を調和的に捉えることができるようになる点である。第三に、説明的文章読解指導の目的と方法が、公教育が目指す社会形成に寄与するものとして関連づけられ、とりわけ言語の意味の共有と生成においてその役割を果たすという示唆が得られる点である。

3. 論文の構成

論文の章立ては次の通りである。

第一章 序言—本論文の見取り図—

第二章 高等学校教員の説明的文章読解指導に対する意識—問題の所在—

第三章 説明的文章読解指導のコミュニケーション論的転回—主体性から相互主体性へ—

第四章 説明的文章読解指導論における筆者と読者との関係性—「評価読み」における「解釈」に焦点を当てて—

第五章 説明的文章教材のジャンル論—「評論文」に焦点を当てて—

第六章 高等学校国語科における説明的文章教材の研究方法論—筆者の思考過程と目的に焦点を当てて—

第七章 研究の成果と課題—相互主体的関係に基づく指導方法論の確立に向けて—

4. 研究の成果と課題

以下、各章の概要を記述することによって、本研究の成果と課題を提示する。

第一章では、論文全体の見取り図として研究の目的と方法、構成、特色と意義を記述した。

第二章では、問題の所在を明らかにするために、高等学校教員が説明的文章読解指導の意義と課題に対してどのような意識を有しているのかを FGI によって調査した。そのデータ分析から、説明的文章読解指導の意義として表 1、課題として表 2 から表 4 のような結果（この他に「その他の課題」がある）を得た。対象者が普通科の教員であった点で限定的であるなどの限界があるため、他の調査手法を組み合わせた検討や、授業のもう一方の主体である学習者の意識調査を行っていくことが課題として残された。

表 1 意義

重要カテゴリ	サブカテゴリ例	重要アイテム例
受験	受験	受験に必要な
知への誘い	教養入門	教養を身に付けるとっかかり
学力の形成	言語技術の獲得	たくさんの語彙を自由に使える
	思考力の形成	日常感覚とは異なる知的な思考法が学べる
	論理力の形成	思考の根底にある論理的な言語運用能力
	解釈力の形成	他者の考えを括弧に入れて自分の考えと向き合う
	批判力の形成	常識や思い込みについて思索する
社会の形成	自己の意識化	ことばを与えて意識化を助ける
	市民性の形成	民主主義社会で生きていくために必要な力を身につける
	公共性の形成	民主主義社会にとって必要である

表 2 カリキュラム上の課題

重要カテゴリ	サブカテゴリ例	重要アイテム例
評論文読解指導の意義の不明瞭さ	評論文読解の意義の不明瞭さ	高校生が評論文を読むメリットが曖昧である
	評論文読解指導の意義の不明瞭さ	社会へのつながりを示すべきである
評論文読解指導の目標の一貫性のなさ	評論文読解指導への共通理解の不十分さ	評論文読解指導に対する教師の意識があまりに異なっている
	教材配列の連関の不明瞭さ	つながりを作るのが個の教師の力に頼られすぎている
評論文読解指導における評価の在り方	テストとの兼ね合い	文章の全体を読む読み方がテストの点につながらない
	受験との兼ね合い	大学が受験問題の解答を公開してほしい
教員の支援体制	多忙な教員	研究したくても多忙である
国語科の統一性のなさ	用語の不統一	教師や教科書・参考書で用語がばらばらである

表 3 教材研究上の課題

重要カテゴリ	サブカテゴリ例	重要アイテム例
評論文の特性	評論文の非日常性	筆者独自の意味を与えられた言葉は辞書を引いても理解できない
	評論文概念の定義の曖昧さ	評論文の定義に統一性がない
教材研究の在り方	教材研究の労力の大きさ	面白くするための手間がかかる
	評論文の分析方法の明確化	構造化の文法がほしい
教科書教材としての問題性	教材と学習者の実態との乖離	中学から高校で突然階段があがる
	教科書教材の改作	改作によって教材の趣旨が変わっている

表 4 実践上の課題

重要カテゴリ	サブカテゴリ例	重要アイテム例
学習者の多様性	学習者の学力の違い	ずっと寝ているのに読める子, 読めない8割
	興味を持たせる方法	興味がない文章を生徒が避ける
	経験と結びつける方法	生徒の経験にどのように結び付けたらよいか
学習者への多様な対応方法の開発	身体的に理解させる方法	要約ができて理解できていない
	論理の身体化の方法	どうやって論理を身体化していくか
	解釈させる方法	筆者に対してまず批判的に読みあるままに読めない
	意見を構築させる方法	自分なりの意見を持てる子をどのように育てるか
学習者主体の授業の在り方	教師による説明の問題性	教師が説明すればするほど面白くなる
	自律的に読ませることの困難さ	生徒が主体的に参加して考える場を作りにくい
一般化可能な方法論の展開	指導の方法論が複雑	落とし込み方が名人芸的である
実践上の副次的な問題	時数の使い方に難しさ	わかった感覚を時間内に持たせることが難しい

第三章では、第二章の記述研究を受け、説明的文章読解指導の理論構築を行う前提としての思想研究を行った。

まず、教育的関係論に着目し、教師と学習者との関係性を「主体—主体」関係と捉えることを論じる久田敏彦と贈与論を援用して教師と学習者及び学習者相互のコミュニケーションによって言語の意味生成の在り様を論じた竹川慎哉の議論を考察した。この考察を踏まえて、筆者と読者との関係性をも相互主体的な関係として捉え、言語の意味生成の問題までを射程に入れる可能性のある理論として、ハーバーマスのコミュニケーション的行為論に着目した。

次に、ハーバーマスの著書『コミュニケーション論的行為の理論』における問題意識とその構成を叙述し、コミュニケーション的行為論を構成する基本的な概念を粗描した。その上で、高田明典のコミュニケーション論的転回の解説を参照しながら、その思想的意義

を考察し、学校教育において相互主体的な関係という視座を導入することが意義となりうるということを確認した。

そして、森美智代が提出した国語教育研究におけるハーバーマス受容の問題を考察した。そこで、第一に、ハーバーマスのコミュニケーション的行為論が言語活動の分析枠組みとして機能しうることを明らかにした。第二に、コミュニケーション的行為論は論理と感情を分離して捉えているものではないことを論じた。そして、第三に、コミュニケーション的行為という試みは教育の場においても、「他者性」を消失させるのではなく、むしろその可能性を現出させる唯一の契機となるという解答を得た。

しかし、コミュニケーション的行為論は、その抽象性によって批判の可能性を担保しているため、現実的なコミュニケーションの問題については、別途の議論が必要であることが明らかになった。

そこで、読解指導におけるコミュニケーションを考察していくための手がかりとして鯨岡峻の理論的変遷に着目した。この考察により、主体と主体とのコミュニケーションそのものから議論を出発するという枠組みから、教師と学習者との教育的関係だけではなく、筆者と読者との関係までをも捉えていくという視座の理解の深化が図られた。

こうした視座は学習者主体の授業の在り方を考える前提となりうる。また、ハーバーマスのコミュニケーション論が社会理論の基礎をなしている点を踏まえると、相互主体的な関係に関する議論が、個人の学力の形成とともに社会の形成とも結びつくものとして捉えられる。このような思想的な枠組みに基づいた上で、国語科教育を展開していくための現実的な議論をなしていくことが一つの課題となった。

第四章では、第三章で検討した相互主体的な関係を筆者と読者との間で築いていく手がかりとして、森田信義の説明的文章読解指導論（森田理論）を考察した。

まず、長期に亘って展開された森田理論を、説明的文章の読みの名称、読みの層、読みの対象という観点から分析し、四期に分けてその概念変容の内実を捉えた。その結果、Ⅲ期において読みにおける「評価」の役割が強調されるようになっていたことが明らかとなった。また、論理概念が初期の筆者概念及び認識概念を包括するように変化している。このことから、「評価」の対象自体には変化はないということが明らかになった。

次に、批判的読解指導論における「解釈」の位置づけという観点から、森田理論における評価概念の考察を行った。その結果、森田理論では、「解釈」は位置づけられているものの、その位置づけの在り方については十分に検討がなされていないということが明らかとなった。

そこで、森田理論に「解釈」を明確に位置づけた再構成を行った。その結果、読みの要素である「情報の取り出し」、「解釈」、「批評」のうち、「解釈」と「批評」の具体を明らかにした。この読みの要素を基にして、説明的文章読解指導における学習者の読解過程を捉えたり、批判的読解指導論の検討を行う基準として活用することが示唆された。

また、「解釈」が「評価」を行う上で妨げにならないことを指摘した上で、「解釈」が社

会形成上、他者との相互了解という観点から必要であることを論じた。このような議論を踏まえると、「評価」は、書かれた情報のみを捉えて自論を展開するのではなく、他者と共同的に意見を精緻化していくためにあるものであると捉えられる。これによって、FGIにおいて指摘された【学習者への多様な対応方法の開発】という課題のうち、解釈させる方法と意見を構築させる方法を構想する観点を得た。

一方で、学習者の主体性を保ちつつ、他者との相互了解を行いうる説明的文章読解指導論を構築するために、「解釈」の指導の方法論を具体化していくという課題が残された。

第五章では、高等学校国語科の説明的文章読解指導において、その読解の対象となる【評論文の特性】に関する問題として「評論文」の定義を検討した。

従来の研究では、評論文は、読者に対して筆者独自の価値判断を論理的な方法によって説得する文章であると捉えられていた。しかし、そうした定義は実際の文章に適用しようとするに十分に機能していなかった。国語科として何のために評論文を読むのかを考究するためには、その読解の対象である評論文の定義を明晰化する必要があった。

そこで、ハーバーマスのコミュニケーション的行為論とパースのアブダクション概念を手がかりに評論文の定義の明晰化を試み、評論文を「アブダクション」によって「ディスクルス」を志向する文章であると定義した。この定義によって、「アブダクション」という性質から、「論理的」であるとも言えるし「論理的」でないとも言えるという従来の定義における矛盾点の一つを説明できる。また、この定義では「ディスクルス」を志向するという目的と「アブダクション」という手段が記述されている。この目的と手段の区別を基にすることによって、評論文とは異なる文種である「論説文」や「随想文」との区別を説明しうる。そして、評論文の公共的議論を引き起こすという目的のためには、常識と似た主張では不十分であるため、評論文が「独自性のある文章」と言われるのは当然であると説明できる。このような説明可能性をもって、「アブダクション」によって「ディスクルス」を志向する文章であるという評論文の定義が妥当であると論じた。ただし、「評論文」に検討の焦点を当てたため、説明的文章の他のジャンルの検討は十分なものといえないという課題が残った。

本研究で定義した【評論文の特性】に従えば、評論文は結論の正しさよりも仮説生成こそが重要視されるはずである。そのため、評論文の読解においては、他者が仮説を生成していく過程を読み解くことを重視する必要があると考えられた。こうした読解を通して学力の形成がなされることになるであろう。また、そうした仮説の提起が公共的に議論をする価値があるかどうかを教室において検討することが、公共性の形成につながると考えられる。

ここまでの議論において、批判的読解指導において「解釈」が適切に位置づけられていないという課題があることを指摘し、相互主体性という視座から読解を「コミュニケーション的行為」として捉えるべきであると考究した。また、評論文の定義を議論した結果を踏まえると、説明的文章を読解指導の教材とした「解釈」の指導において、「コミュニケー

シヨンの行為」と「アブダクション」という二つの概念が有効な視座となると考えられた。

そこで、第六章では、高等学校国語科における説明的文章の教材研究の観点として、ハーバーマスの「コミュニケーション的行為」とパースの「アブダクション」を援用した分析方法が有効であるかどうかを検証した。具体的には次のような手順により、筆者の意図と思考過程を明らかにする方略として、二つの概念を援用する教材分析が有効的であるかを検証した。

まず、高等学校教科書『国語総合』の説明的文章教材である「水の東西」と「マルジャーナの知恵」を、従来の教材研究における観点による分析方法と、「コミュニケーション的行為」と「アブダクション」を援用した分析方法とによって、それぞれ分析した。そして、PLT の観点に基づき、従来の分析と本研究における分析の結果を比較し、本研究における分析によって筆者のコミュニケーション上の目的と論理の暗黙的な関係に至る思考の過程を捉えることができることを明らかにした。また、トゥールミンモデルに基づく分析との比較を通して、筆者の主張を捉えることと筆者の目的あるいは問題意識を捉えることとは同じではないことを指摘した。そして、議論の枠組みそのものに依拠する無批判な受容に陥らないためにも、問題意識の「解釈」が必要であると論じた。

その上で、「解釈」に関わる読解力向上を図る上で、説明的文章教材の読解指導の有する意義を考察した。その中でも、言語表現の意味を考察することが国語科において社会形成という役割を果たす中心的な位置を占めると考えられた。そうした指導を行うための課題設定の方法として、「評論文」と「論説文」という定義を読解の観点とし、三種の推論形式に置き換えることと目的を二つの観点で解釈することを学習者に要求することを示唆した。

ただし、本調査は、【教材研究の在り方】という課題に関し、評論文の分析方法を明確化することに寄与するが、教材研究の労力の大きさを軽減するものであるかどうかについての検討がなされていないという課題が残る。また、本研究における分析に基づく教材研究によって導き出された指導目標による授業をどのように展開するのが妥当であるかの検討が要請される。今後、実践における有用性という観点からの考察を深めていく必要がある。

第七章では、第六章までの議論を踏まえた上で、相互主体的関係に基づきながら「実践上の課題」を乗り越える指導理論として『学び合い』研究に着目しながら、説明的文章読解指導の方法論を構築するための展望を述べた。